

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

平成 23 年 6 月 13 日

派遣者氏名（専門分野）	重川 真紀（音楽学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	カロール・シマノフスキの手稿譜研究——オペラ《ルッジェーロ王》作品 46 の成立史と新たな作品解釈の可能性
-------	---

派遣期間

2011 年 2 月 7 日 ~ 2011 年 4 月 8 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	ポーランド	ワルシャワ	ワルシャワ大学図書館（ポーランドの作曲家アーカイヴ）	ズビグニェフ・スコヴロン（ワルシャワ大学教授）

派遣先で実施した研究内容

今回の調査では、ワルシャワ大学図書館内「ポーランドの作曲家アーカイヴ」に所蔵されているカロール・シマノフスキの手稿譜、なかでも作品スケッチと草稿を中心にそれらの整理状況の確認ならびに記譜内容の分析を行った。

同アーカイヴに保管されているシマノフスキの手稿譜は、その大部分がスタニスワフ・ゴラホフスキ（1907～1951）によって収集され、作品毎に整理されたものである。ゴラホフスキの死後、これらの手稿譜は「ポーランドの作曲家アーカイヴ」に寄贈され、その後の作業は当アーカイヴに引き継がれた。現在およそ 140 点にのぼるシマノフスキの手稿譜が同アーカイヴに収められており、そのうち作品スケッチ、草稿にあたるものは全体のおよそ三割を占めている。今回の調査では、1882 年に出版された『シマノフスキ手稿譜カタログ』を参照しながら、まずはスケッチと草稿にあたるシマノフスキの手稿譜の全体像をマイクロフィルムで確認し、各々の特徴を整理した後にオリジナルの調査へ入った。

具体的な作業としては、本研究の中心となっているシマノフスキのオペラ《ルッジェーロ王》作品 46 の手稿譜をもとに、そこに書き込まれたさまざまな指示記号や数字とそれ以外の作品で用いられているものとの比較・検討を行った。例えば、《ルッジェーロ王》の草稿では、しばしば数列が周期的に現れるのだが、今回行ったマイクロフィルムの調査で、《交響曲第四番》の草稿に極めてよく似た数列が見られることが明らかとなったため、後者の場合にみられる数列の規則や目的を明らかにしようと試みた。この作業には、作品の初期段階のスケッチから浄書にいたる各段階の手稿譜が必要となるため、スケッチの断片のみ、あるいは草稿のみが現存している作品の場合には明確な結論を導きだせないこともあり得る。幸い《交響曲第四番》はスケッチから浄書に至る手稿譜（「浄書」のみ写真複製。なお、この写真複製はカタログには掲載されていない）が同アーカイヴに保管されていたため、オリジナルを参照しながらその成立過程を詳細に再現することができ、各段階で用いられている記号や数字の意味を明らかにすること

ができた。

この作業と平行して、作品ジャンル毎にみられるシマノフスキの記譜法の特徴を整理し、シマノフスキの作品において、アイデアが生まれてから作品として形をなすまでの具体裏面に続くセスを調査した。また、五線譜にも注目し、《ルッジェーロ王》作品 46 の手稿譜に用いられている五線譜と同じものが使われている作品スケッチや草稿を取り上げて、記譜内容の比較を試みた。さらには、シマノフスキの同時代の音楽家であり、またワルシャワ音楽院で同門でもあった G・フィテルベルクらの手稿譜も調査対象に含めて、そこに見られる記譜の特徴とシマノフスキの記譜法との比較を試みた。

これらの作業にあたり、受け入れ研究者であるワルシャワ大学教授ズビグニェフ・スコヴロン氏、当アルヒーフでシマノフスキの資料整理にあたってこられたエルジュビェタ・ヤシンスカ=イェンドロシュ女史との面談を随時行いながら調査を進めた。またポーランド音楽出版社でシマノフスキの一次資料の蒐集、楽譜の校訂を行ってこられたテレサ・ヒリンスカ女史とも面会し、シマノフスキの一次資料研究を行う上での有益なアドバイスをいただいた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

当初の予定ではシマノフスキの手稿譜の調査ならびに彼と同時代に活動した作曲家らの手稿譜も調査する予定だったが、シマノフスキ以外の作曲家については、同アーカイヴに保管されている手稿譜の多くが浄書であり、スケッチや草稿がきわめて数少なかつたことから、当初見込んでいた成果は得られなかった。それでも、G・フィテルベルクの作曲スケッチからは、用いられている五線譜の種類や記譜の特徴など、シマノフスキの手稿譜を分析するうえで参考となる情報が得られた。

シマノフスキに関していえば、作品ジャンル別（器楽作品、声楽作品、管弦楽作品等）にスケッチや草稿を見ることによって、それぞれの作曲プロセスの特徴を把握できたほか、そこに書き込まれたさまざまな記号や数字の意味が一連の手稿譜によって明らかになったこともあり、彼の作曲プロセスの流れをある程度再現することができた。

これらはシマノフスキのオペラ《ルッジェーロ王》の詳細な作曲プロセスを再構築するうえで必要となるだけでなく、ある特定の作品に限定されない彼の全体的な作曲プロセスを明らかにするうえでも貴重な情報だといえる。

派遣後の研究発表の予定

今回ワルシャワで行った調査結果をもとに、日本音楽学会ならびに西スラヴ学会をはじめとする学会誌に論文を投稿する予定である。また研究会や学会での口頭発表も行い、最終的には博士学位請求論文（大阪大学文学部博士）として提出する予定である。